

# 生活世界と実践論的転回

—ハイデガーと社会的実践理論 (3)

福 士 正 博

## VI 社会的実践理論から見た生活世界

「レクヴィッツやシャツキの社会的実践理論の底流に流れているのが前期ハイデガーの『存在と時間』に代表される解釈学的現象学と後期ウイトゲンシュタインの『哲学の探究』に見られる言語学であったことからすれば、社会的実践理論がどのような哲学を基礎に構築されているのか、そしてそれを基礎にあらためて転回しなければならなかった新しい理論的背景とは何かが説明されなければならない」(Miettinen 2010)。

現象学的還元を超越論的還元へに転換し、その一環として世界意識に対する自然的態度を新たな世界地平の構築にまで高めることによって明証性の領域を確保しようとしたフッサールの生活世界は、どのようにしてその正当性を確かめることができるのだろうか。超越論的還元によって登場した超越論的態度では、「自然的態度による一般的定立」という命題が勝手気ままに世界を定立する可能性に転化してしまう可能性を否定することができない以上、純粹意識の働きによって可能態として仮想された世界が人々の営む現実の生活世界として常に存在し続けることが保証されていなければ、その正当性も保証することはできず、たんなる暴論に転化してしまいかねない。フッサールが提唱する構成的現象学は最初からこのような限界を抱えていた。すでに指摘したように、フッサール自身、『ブリタニカ草稿』の中でここに問題があることに気づいていた。フッサールは、これを、フッサール批判者が提起する問題ではなく、自らが答えなければならない問題として受け止めていた。『デルタイとフッサール 20世紀哲学の源流』を書いたボルノーによれば、「根本的にフッサールは、生活世界の具体的な構成にそれほど大きな関心を寄せていない。超越論的な現象学的転換において生活世界は、世界を構成する超越論的自我へ、「能作する生」とも呼ばれる超越論的主観性へと還元されるわけだが、そのための出発点をなすものとして、フッサールのいう生活世界は用いられている。問題なのは、『世界がいかに成立するか』ということなのである」(ボルノー 1986, 99頁)。

この指摘にあるように、フッサールは、生活世界を、具体的かつ客観的に分析しようとはしなかった。生活世界の主題化が晩年であり、『危機』がこの主題を全面的に取り上げるこ

とがなかった未完の成果であったということも一因となっている。『危機』におけるフッサールの関心は、「世界がいかに成立するか」という問いに、現象学的還元を背景に、超越論的主観性の能作、すなわち超越論的自我によって世界は構成されていることを明らかにすることに限定されていた。フッサールによれば、「あらかじめ与えられている生活世界の存在意味は、主観形成体なのであり、学以前の経験する生の所産なのである」（フッサール昭和49、97頁）。学以前であるからといって、生活世界が近代科学の打ち立てた世界と比べて劣っているということではない。「根源的な明証性の領域」である生活世界（同、179頁）は、「学以前の経験と思考に、ないしその経験と思考によってつくり出された妥当性にもとづくいっそう高次の形成体なのである」（同、97頁）。生活世界はこのように、学以前の経験と思考に妥当性を与えるからこそ、科学に劣っているわけではなく、むしろ逆に、「高次の形成体」として高い評価が与えられている。しかし、フッサールの営為はここまでである。生活世界は、超越論的態度によって人々が営む「高次の形成体」と言うだけで、その存在の正当性は、「疑いえぬ自己」の存在と純粹主観から生み出された世界地平という指摘の次元にとどまっている。「フッサールが行ったのはここまで」という言い方は、それまでのフッサールの営為に誤りがなく、その先が展望されていないからという意味ではない。生活世界を主題化することの意義を強く意識しながら、その構造の分析に着手しよとしなかった彼の関心は根本的な欠陥を抱えていたのである。即自的な生の分析を回避しながら、根源的な学問領域として生活世界を追究しようとしていたフッサールは、純粹意識にこの矛盾の解消を求めていたために、逆に、現実に行進する生活のあり方から離れてしまっていた。すでに指摘したように、この欠陥は、フッサールが認識論としての生活世界論にとらわれ、生活世界を存在論として構成する視点が欠如していたことによる。デカルトからカントへ受け継がれてきた近代認識論の欠陥を引き継いでいるために、その枠組から脱け出すことができず、この欠陥は生活世界論にも反映してしまっている。生活世界を主題化したからといって、その問題群を取り上げる視座に欠陥があるなら、その視座を断ち切らなければ、その全体像を明らかにすることはできない。問題は、純粹主観に代わる新しい視座をどこに求めるかである。生活世界の根源的明証性の領域としてフッサール現象学が定めた意識に社会的実践理論が対置するのは実践である。冒頭の引用にあるように、社会的実践理論の代表的研究者シャツキは、前期ハイデガーと後期ウイトゲンシュタインに学びながら、実践を生活世界の根柢に置いている。

言うまでもなく、生活世界を追究しようとするハイデガーの方法論もまた現象学である。純粹意識に沈潜することで生活世界のリアリティを描く道を閉ざしてしまっていたフッサールに対して、ハイデガーもまた現象学をその追究の基礎に置こうとするかぎり、フッサールと同じ危険性を免れているなどと簡単に言うことはできない。存在者（実在する外的世界）の陰に隠れて見えなくなっている存在の意義を主題化したハイデガーの現象学が、同じよう

に陰に隠れて見えなくなっている生活世界を開示し、その態様を根源的に明らかにすることができるかどうかは、それ自体独自の検証を必要とする。現象学を基礎に置くかぎり、存在と同様に、生活世界もまた、「ありのままに、おのれを示すもの」として、自身の方から見えるようにならなければならない。しかし、生活世界のリアリティは、必ずしも現実的で、具体的な姿を克明に描くことであらわになるというものでもない。ハイデガーが現存在の平均的日常性を描こうとしたのは、「特定の実存の差別相において解釈する」のではなく、「きわだった差別のない現存在の日常性」を描くことの方が存在者の積極的な現象学的性格を明らかにできると考えていたからである（SZ 43）。生活世界のリアリティを描こうとする場合でも、存在と同じように、その平均的日常性を描くことが現象学的近道となる。問題は、社会的実践理論が平均的な生活世界をどのようにキャンバスに描くことができるかにかかっている。

ハイデガーが生活世界を本格的に論じるようになったのは、1919・20年冬学期講義『現象学の根本問題』においてであった。池田喬によれば、ハイデガーはこの時期（初期ハイデガー）、「事実的な生活世界」を生と世界を生から乖離することなしに探究する方法を現象学の基本課題として主題化し、環境世界・共同世界・自己世界の相互浸透を世界＝内＝存在という前期ハイデガーの基礎概念へ統一的に継承させたのだという（池田2015）。『現象学の根本問題』においてハイデガーが「私たちの生は、世界の内では生きていくかぎりにおいてのみ、生としてある」と述べる時、そこで想定されている（生活）世界は、『存在と時間』において主題化された存在と同じように、存在者の陰に隠されて直接は可視化できない「内存在の場としての世界」であり、それ自体存在者として存在している外的世界を指しているということではなかった。シャツキは、『『存在と時間』において行われているハイデガーの空間に関する議論はこうした生きた空間に焦点があてられている。生きた空間と客観的空間との違いを明らかにするために、ハイデガーは通常、世界＝内＝存在の空間に対して「空間性」という言葉を保持していた」と述べ（Schatzki 2017, p.37）、世界＝内＝存在と客観的な外的世界との違いを際立たせるために、生活世界を「生きた空間」と表現している。

空間は、ハイデガーの世界＝内＝存在の議論から、世界を構成する実体の空間性と内存在の空間性の二つに分けられる。前者はハイデガーが環境的世界と呼ぶ道具的世界、すなわち社会的実践理論が社会的秩序と呼ぶ世界、後者は人々の世界への実践的関与の空間性を記述したものである。シャツキによれば、二つの空間は、「世界＝内＝存在が統一現象であることによって重なり合っている」（Schatzki 2017, pp.42～43）。シャツキは、二つの生活世界が、ハイデガーの世界＝内＝存在という概念によって統一的にとらえることが可能になっていると指摘している。

「そこに存在するということは、彼女の現在の世界を作り上げている対象物によって完全に囲まれている身体の問題なのではない。そうではなくて、人が世界の中にいるということ

の意味は関与ということにある。すなわち、世界の中にいるということは、それを構成している実体のただ中で扱い、進行していることで、その中で関りを持つということである。こうした「中」について、ハイデガーは、「居住する」というところに由来させている。“At”は、慣れ親しんでいるということを表象している。何かに配慮しているというように、親しみを感じながら、世界の中に私は居住している。世界＝内＝存在であることは、自己の目的のために、プロジェクトを実施する中で、世界の実態のただ中で配慮しながら進んでいくことである」(Schatzki 2017, p. 43)。

この指摘から、世界＝内＝存在は、現存在が内存在として世界に馴染みながら「居住している」様態を表わす概念であることがわかる。ハイデガーの生活世界はこのように、内存在を精緻化する中で追求されており、客観的に存在している外的空間が想定されているわけではない。社会的実践理論が、生活世界を社会的な場として空間的にとらえようとするときでも、その世界を外的に実在する客観的で、絶対的な空間として把握できるということにはならない。

本稿の目的は、生活世界の明証性の領域である実践について、シャツキの議論を追跡することで、前期ハイデガーの行為論からその意義を引き出すことにある。ハイデガーの行為論は社会的実践理論とどのように接続し、生活世界論に結実しているのかを以下で明らかにしてみたい。問題の核心は、生活世界の根拠としてハイデガーの行為論がどこまで有効なのかを問うことで、生活世界の開示に関するハイデガーの現象学の有効性を確かめることにある。そのために、まず、社会的実践理論が生活世界をどのように構成しようとしているかについて見てみよう。

### (1) 実践空間：社会的秩序と生活世界

シャツキによれば、実践とは、「共有した実践的了解可能性をめぐって中心的役割を果たす、組織化された、身体化され、物質的に仲介された一連の人間活動」のことである(Schatzki, T. et. al. (ed.) 2001, p.2)。この定義に従うならば、実践は、共有した実践的了解可能性、組織化、身体化・物質化された人間活動を特徴としており、たんなる人間が行う行為や行動とは区別された概念である。とくに、実践的了解可能性が社会的実践理論研究者の中でも意見が分かれる特徴であることからすると、シャツキの社会的実践理論がハイデガーの行為論から何を引き出したのかを取り上げることはとりわけ大事な意味を持っている。

「実践が社会現象であることは言うまでもない、何故なら、実践の中で分節化されている理解や了解可能性は、社会生活を秩序化する基本媒体だからである。こうした立場は、了解可能性の基礎的重要性を広める他の多くの20世紀の社会理論と類似している。実践理論は、了解可能性を、多様な活動の中に位置づけるという点で、多くの理論(すなわちテキスト性に関する脱構造主義)と異なっている」(Schatzki 1997, p.284)。

最初に、社会的実践理論が生活世界をどのように描こうとしているかについて基本的論点を整理しておくことにしよう。生活世界とは、繰り返し述べてきたように、起床する、歯を磨く、掃除をする、洗濯をする、読書する、通勤のために車を運転するなど、人々が日常的に繰り返し行っている実践が束になって構成された平均的な共有世界である。共有とは、これらの実践が一人とか二人だけで行われているのではなく、多くの人々が日常的な慣習的行為として行っているということ、平均とはこれらの行為が普遍化するほどの社会的広がりを持つようになっているということの意味している。

シャツキは、この世界を、ハイデガーにならって、場 (sites) の存在論としてつかまえようとしている。社会生活とは、様々な実践が積み重なることで形成される場である。エリザベス・ショブとゴードン・ウォーカーが「社会的実践はたんなる相互作用の「場」(sites)ではなく、その代わり、全体を秩序化し、組み合わせるラディカルな提案である」と言うとき、そこでは、生活世界の形成に果たす実践の組織化の役割が強調されている (Shove and Gordon 2010)。シャツキも同様に次のように指摘している。

「社会的な場とは、人間が共存する具体的文脈のことである。すなわち社会的な場とは、社会生活が本質的に生まれる場であり、その一部である。社会的場の概念を通じて社会性を理論化することは、社会生活の性格と転換が本質的かつ決定的にそれが行われる場に根ざしているという点を保持することである。この場の文脈は、秩序と実践が織りなすところで構成されている。秩序が実体 (人々、人工物、ことがら) の編制であるのに対して、実践は組織化された活動である。人間の共存は編成されたことがらと組織化された活動の、丹念で、常に進化するつながりとして、そしてまたそのただ中で生み出される」 (Schatki 2002, p. xi)。

社会的な場とは、社会生活が本質的に営まれる場である。秩序と実践が結びつくことによって形成されるひとつの複合体を、場の視点から、シャツキは「実践空間」(practice plenum)と呼んでいる。「社会生活は本質的に実践と編成のつながり (bundles) の一部である。まとめて言えば、これらのつながりがひとつの空間を形成している。そこから出てくるのは、社会現象とはこの空間の側面とか断面ということになる。その結果、実践空間の構成要素が、社会生活が構成される素材となる。更に言えば、この空間は、構成的つながりや集合体と同じように、実践、編制、それを構成する関係以上のものではない。その結果、空間の中心的要素、すなわち社会現象が構成される基本的素材は、実践、編制、実践と編制をつなげる関係、それらをひとつの集合体へとつなげるつながり間の関係である」 (Schatzki 2019, p. 27)。

本稿では、この社会的な場、すなわち実践空間を生活世界に読み換えようとしている。注意しなければならないのは、シャツキが社会的な場とか、社会生活、社会的秩序と言うとき、狭義の意味と広義の意味の両方で使っていることである。したがって、どちらの意味で使用されているかは、文脈にそくした理解が必要になる。生活世界を取り上げる場合でも、シャ

ツキがどちらの意味で使おうとしているのかを正確に見極めてみなければならない。一般的な言い方をすれば、実践空間は広義の生活世界を指している。それに対して、例えば、「社会的秩序」とは、生活の組織化を意味している」(Schatzki 1996, chap. 6) というときの社会的秩序は通常、狭義の生活世界を取り上げている。シャツキは、「社会的秩序とは、社会生活が生み出される実体の全体である一人間の共存を特徴づけている、人々、人工物、有機体、事象の編制。全ての社会生活は社会的秩序を特徴としている。全ての社会生活は、結果的に、関係性、意味、相互の位置を表わしている」と述べている (Schatzki 2002, p. 38)。このような使い分けが行われるのは、社会的な場に関するシャツキの理解に混乱があるからではなく、むしろ逆に、社会的秩序と実践の関係を分節化するための必要な手続きと考えられているからである。この手続きで重要なのは、「社会的な場とは、人間が共存する具体的文脈のことである」と述べられているように、生活世界の本質が「ともに生きる構造」(Zusammenhang)にあるというシャツキの主張にある。シャツキにとって最も大事だったのは、人々の結びつきが個人主義者の言うような諸個人の相互交流 (companionship) ではなく、どのような構造の下で人々は共有した世界を作り上げることができるのかという関心にあった。シャツキが求めているのは、最初から社会性を帯びた、世界の中に投げ出された (被投された) 人間の、他者ととともに生きる実存的姿である。

ここではひとまず、狭義の生活世界を規定している社会的秩序の視点から見てみよう。シャツキは、「ともに生きる構造」について、「人間の共存は、各人が個人で行っている文脈を形成する人間の生き方のつながりである」と述べているように、文脈とつながりという二つが構成要素となっている。社会的秩序というと、規範とか、言説、権力といった社会を統治する基本的原理と考えるのが普通である。それに対してシャツキは、秩序の形成原理を「それぞれの実体が意味と場所を持つ編制」(Schatzki 2002, p. 19) に求めている。

まず、つながりについてである。シャツキは、「私が好んで使っているのは、秩序を、どのような種類のものであれ、つながり (nexuses) として概念化することである。「ともに生きる」という概念には、あらかじめつながっている存在という考えが含まれている」と述べている。このように、この構造には、最初から社会性を帯びた、世界の中に投げ出された (被投された) 人間の、他者ととともに生きる実存的姿が映し出されている。生活世界を存在論から描き出そうとする方向性をシャツキはハイデガー哲学から学んでいる。ただし、その場合でも、社会的秩序を人間の生活のたんなる編制と考えてはならない。先の引用にあるように、社会的秩序は、人々、人工物、事象という構成実体それぞれが適所的位置を占有し、意味を獲得することを通じて形成される編制を指しており、そうした物質的環境の中で人間は他者ととともに生きる空間を作り上げている。「人間の共存は本質的に実践と物的編成のつながりの一部として生み出されている」と述べているように、シャツキが考える社会的秩序は、人間の共存ばかりでなく、人間と物質とのつながりの中で理解されている。

この構造は、個人主義のように、諸個人の相互交流といったたんなる結びつきを指しているのではない。社会的秩序を実体のたんなる結びつきと考えるならば、生活世界という社会現象も、ウェーバー、シュッツなどの存在論的個人主義（したがって社会的唯名論）の立場から考察することになり、結果的に、純粹意識から生活世界を導き出したフッサール現象学を批判することもできなくなってしまう。例えば、シュッツは、彼の初期の研究成果である『社会的世界の意味構成』において、孤立した意識の精神生活における意味を有意義な経験の構成に関する分析から始めている。シュッツの社会的世界に関する分析は、「私は他者をどのように理解できるのか」という設問に答えているだけにしかすぎない。これでは結局のところ、社会的秩序の分析は、一人の人間が他者とどのように遭遇するのかという「出会い」の場を考察することにしかならなくなってしまう。また、全体主義のように、規範や社会的価値といった、全体を想定し、その特性から秩序を説明するようなことをしてもならない。両者を批判するには、後に述べるように、実践が諸個人やその相互関係とは異なる人間共存のひとつの領域であることから、生き方に関係しあう媒介物であるという視点を持つことである。「ともに生きる構造」とは、現存在が最初から共存在（Mitsein）として実存し、実践の中で、また実践を通じて相互に関係しあう諸個人が作り上げるものだからである。世界に投げ出された現存在が世界で出会う他者と交流することで共存在になるということではない。むしろ、世界に存在する中で、現存在はそもそも他者とともにある共存在なのであり、その中で現存在は世界の中に存在しているのである。ここで求められているのは個人主義や全体主義を批判する存在論的社会主義（ontological societyism）である（Schatzki 2000）。社会的秩序のつながりを媒介しているのは実践であり、その背後にあるのが存在論である。ウェーバーの理解社会学が想定しているような個人主義的行為論であってはならない。

生活世界を社会的実在が編成される場と理解するならば、そこで生活を営む人間は、自らの位置を確かめるために、意味やアイデンティティを獲得していなければならない。「アイデンティティを備えた実体とは自らの意味を理解している実体である」というシャツキの指摘にしたがうならば（Schatzki 2002, p. 47）、社会的秩序を構成する実体の意味やアイデンティティが何を根拠に獲得されているのかを問うことが決定的に重要となる。実体の編成には、たんなる結びつきではなく、そこには全ての要素が内的に関連し合う意味の領域が含まれている。意味をめぐる交渉が秩序の安定につながっているからである。「ともに生きる構造」には、意味とアイデンティティを獲得したことによる安定と、交渉過程で実体の位置が揺らぐようになる不安定要素が常に共存している。言うまでもなく現存在は、世界に投げ出されているからといって、それだけで意味やアイデンティティを獲得できるわけではない。世界に投げ出されている存在は、自らを世界に向けて投げ出す企てを持たなければ、意味やアイデンティティを獲得することができない。その企てを担うのが実践である。社会的秩序ばかりでなく、それを支えている社会的実践を含めて概念化した実践空間を、ここでは広義

の生活世界と呼ぼうとしている。

## (2) 社会的実践—社会的秩序を支えるもの

「何かが存在しているということは、基本的に、それが何であるかを了解しているということである。了解は更に、社会的実践の中で行われ、実践を構成している、すること、述べることの中で表現されている。とくに、何かは所与の実践の中で了解されているということは、それが実践のすること、述べることによって表現されているということである。意味は、その結果、社会的実践によって担われ、その中で確立されている。実践は更に、組織化を身体化したものであり、実践の中で設定され、そこに含まれた意味や編成を制限している。意味は、差異、抽象的図式、或いは帰属的相対性の問題ではなく、活動や、「実践」とよばれる了解可能性の領域の中で規定されたりアリティなのである」(Schatzki 2002, p. 58)。

社会的秩序を構成する実体がそれぞれどのような適所の意味を持つのかは、主体の認識によってではなく、実践を通じて獲得される領域である。それは、実践を構成する、すること、述べることの中で表現されている。シャツキは、このことをハイデガーから学びながら、理解を了解に置き換えている。理解が認識に基づいているのに対して、了解は実践に基づいて行われる実存様式である。

「人間の共存を生み出す社会秩序がこうしたつながりの中で確立されていると言うことは、その構成要素の関係、意味、アイデンティティ、地位が一定の組織化された人間活動の束に拘束されているということである。こうした状況は、要するに、人間は社会的秩序を通じてばかりでなく、社会的実践を通じてともに生きているということである」(Schatzki 2002, p. 59)。

社会的な場、すなわち生活世界を探究する上で、つながりと同時に大事になるのは文脈である。社会的な場は、秩序と実践が織りなすところで構成されている。(狭義の)生活世界が社会的な場としての秩序を指すのであれば、それを支えているのは組織化された実践である。実践が秩序を支えているということの意味のひとつは、「社会的実践が社会的秩序形成の文脈を形成しているという点にある。もっと具体的に言うと、実践が文脈を形成するとともに、社会的編制の場ともなっているということである」(Schatzki 2002, p. 70)。この指摘にあるように、実践は秩序の文脈形成の役割を果たしている。それでは、ここで言う文脈とはどのようなことを指しているのだろうか。

最初に確認しておくべきは、文脈形成を、社会的秩序を構成する諸要素が結びつく客観的背景の形成というように、たんなる背景に置き換えてはならないことである。客観的背景を社会的秩序の前提におくならば、つながりもその背景に合わせて事後的に行われるだけのことになってしまう。文脈形成はそのような見取り図におさまるものではない。つながりを媒介しているのが実践であるように、秩序形成の文脈を形成しているのも実践である。文脈は



実践とともに現われるのであって、事後的にはない。シャツキが生活世界を探究する上で実践の役割を高く評価するのも、実践がつながりと文脈形成の両面で果たしている役割があるからである。このような役割を持つ実践は行為という概念におさまるものではない。シャツキによれば、「文脈化の鍵は、行為が実践を前提にしているということにある」(Schatzki 1996, p. 96)。人は、日常生活の中で、起床する、歯を磨く、掃除をするなど、様々な行為をあたかも自明であるかのように、繰り返し行っている。それらの行為をあえて実践と呼ぶのは、実践がたんにすること、述べることというだけでなく、その背後に、(1)それが行われる状況と、(2) X や Y, Z の中で X を行うという行為、の両面で了解が行われているからである。すなわち、すること、述べることが実践の中で結びついていることによる行為の了解である。

ここで大事なのは、シャツキがハイデガーの了解概念から学んだ実践的了解可能性 (practical intelligibility) という概念である。了解可能性とは、ことがらを正当に意味づけることである。ハイデガーの基礎的存在論において、了解は、おのれを了解することと、世界を了解すること、という二つの領域がある。シャツキの了解可能性には、ハイデガーの主張を受け、世界がどのように意味づけられるのか、どの行為に意味があるのか(行為主体はどのような存在か)という、二つの基本的領域がある。生活世界との関係で言えば、秩序を形成する構成要素のどのような結びつきに正当な意味があり、その結びつきを媒介する行為の正当性は何なのかを了解することである。シャツキは、この了解を行うのが実践であるという意味で実践的了解可能性と呼んでいる。実践的了解可能性にはこのように、世界と行為の意味を問う二つの領域がある。シャツキは、「両方の領域は、実践の組織化を通じて分節化される。このことは、事物がどのように意味づけられ、人々が行う行為の意味がどのようにこれらの組織化によって形成されるのかということである」と述べている (Schatzki 1996, p. 111)。

シャツキは、『社会的実践 人間活動と社会的なるものへのウイトゲンシュタイン的アプローチ』第4章「社会的実践」に、「了解可能性の分節化」と題した節を設け、二つの領域について詳しく説明している。

世界の了解可能性：「世界了解可能性とは、ものごとがどのようにして意味を持つようになるのか、すなわちその意味にある。ものごとがどのような意味を持つのかは、それが何であるかが理解されているということである」(Schatzki 1996, p. 111)。

意味づけは、すること、述べることが一体となって行われる。例えば、木という実体の意味は、木と発話された(述べた)だけでは確定することができない。木に登るとか、木を観察するなど、することと一体となることによって木の意味が明らかになる。すなわち、木の理解は、すること、述べることをどちらも優先することなく、両者が織りなす中で表現され、獲得されている。

世界が社会的な場としての秩序であるなら、実践的理解可能性は、その構成要素が実践を通じてどのようにつながっているかについての理解でなければならない。生活世界はそのつながりの中で形成されている。そのため、実践を媒介にした秩序の正当性は、実践の正当性を保証することでもある。シャツキは、「人々は、一般的に、当該実践に参加しているゆえに、こうしたやり方で一定の人々に正当な意味を与えており、そのことで彼女はこれらの意味を確立する理解を獲得するとともに、彼女自身のすること、述べること中で実践を恒久化し続けている」と述べている (Schatzki 2002)。レクヴィッツの言葉を借りれば、「実践における知識とは、対象物、人間、自己の理解を含む、「世界を理解する」特定の方法を指している」ことになる (Reckwitz, 2002a)。

それでは、実践を、フッサール現象学の純粹意識を完璧に置き換えた概念と考えるだけでよいのだろうか。この問いに仮に肯定的に答えたとしても、実践によって保証される正当性は、それを保証する正当性根拠を必要とするというように、無限後退に陥るだけで、意味のない問いにすぎなくなってしまうのではないかという疑問が生まれてしまう。この疑問に答えるためには、そこで想定されている世界がどのようなものなのかを吟味してみる必要がある。

「実践はこのように、規範化された相互に関連した意味を具体化することで、実体（対象物、人々、イベント）のつながりの理解可能性を分節化するという意味で「世界を構成している」。意味を通じて構成している世界が実体を存在させているわけではないことは当然である。その代わり、実践は、相互に関連した意味を実体に預けることで、それらに向かって行われる行為を調整し、相互に関連したつながりの中へ実体を組織する」(Schatzki 2002, p. 115)。

この指摘にあるように、実践は世界を構成しているだけで、実在そのものを作り上げているわけではない。実践が行っているのは、「相互に関連した意味を実体に預ける」ことだけで、常に行為調整の過程が進行しており、その過程を通じて世界は組織されている。フッサール現象学が純粹意識の能作によって生み出した生活世界を可能態として仮想しているように、実践を媒介に正当性を保証しようとする社会的実践理論の生活世界も同じように仮想態でしかない。だが、そうであっても、ここで問われなければならない肝心なことがらは、シャツキが、精神/行為 (mind/action) という概念を同書の主題として追究しようとしていた理由である。シャツキは、フッサールのように、精神、すなわち意識を、世界を生み出す根拠とは考えていない。シャツキは、「精神/行為から始める理由のひとつは、その理解が社会的実在論において果たす中心的役割をあらためて強調することにある」と述べ、「精神/行為の社会的決定要因を熟慮すること」を執拗に追究している。この問いにシャツキは、「実践が組織化されることをつうじて、精神が一つの「媒介物」へ変化する」と述べている。すなわち、実践は、精神を媒介に世界に向かって開示される行為である、だからこそ、精神、或

いは意識を独り歩きさせるのではなく、行為と一体のものとして理解する必要がある、というのがシャツキの結論であった (cf. Schatzki 1996, chap 2, 3)。レクヴィッツも、「社会的実践は、一定の身体的かつ精神的活動からなっている。誰かが実践を「行う」場合、彼或いは彼女は実践を構成する身体的、精神的型式の両方を引き受けなければならない」と述べている (Reckwitz 2002a)。

行為の了解可能性：「行為の了解可能性の分節化とは、人々にとって行うことが正当であるものを具体化するということである。さらに、人々にとって行うことを正当化しているものは、彼らにとって、行うべき行為として「意味づけられている」(“signified”) ものである。人々は常に様々なことがらを行うことができるし、そうする準備をしているが、ある時点で、彼らは常に、行うことが正当な、意味づけられている行為を行っている」(Schatzki 1996, pp. 118)。

ここで述べられているように、行為の了解可能性の分節化とは、行うことを正当化しているもの、すなわち行為を意味づけているものを特定するということである。ハイデガー哲学の道具的指示連関との関連で言えば、環境世界との交渉の中で行為の正当性を見定めることが、行為の了解可能性に課せられた課題となる。つまり、行為の了解可能性によって正当化された行為を行うことによって世界の有意味性があらわになるということである。その意味で、行為の了解可能性と世界の了解可能性は連動している。シャツキがたんなる了解可能性ではなく、実践的了解可能性というように実践の役割を強調しているのは、実践を通じて世界=内=存在としての現存在が世界の中で適所的位置を与えられるとともに、世界への没入が可能になることをハイデガーから学んでいたからである。

この点をシャツキ以上に最も鮮明に打ち出している研究者の一人に、ハイデガー哲学研究者として著名なヒューバート・ドレイファスがいる。最も鮮明に打ち出しているというのは、了解が必ずしも明示的である必要はなく、非明示的で、背景に隠れていても構わないという点を主張することで、実践の裾野を広げているからである。彼は、『世界内存在』と題した研究成果の中で次のように述べている。

「ハイデガーは、我々の日常の了解を全面的に明示することが可能であるという考えにも、そうすることが望ましいという考えにも異論を唱える。彼の導入する考え方は、我々が社会化されてそのなかへと巻き込まれているような相互に共有された日常的技能・識別能力・振舞いが、対象を取り上げ、自分たちを主体であると了解するための、また一般に世界と自分たちの生活が分かるための必要条件を構成しているということである。更に彼の論ずるところによれば、このような振舞いは、それが背景にとどまっているときだけ機能しうるのである」(ドレイファス 2000)。

ドレイファスによれば、ハイデガーが主張する存在了解は、意識の表に出て明示化することができるというようなものではない。存在了解は、背景に隠れているもの、すなわち「心

のうちに表象されることのない存在論」というように、ハイデガーが前存在論的了解と呼ぶものに近く、実践はこの隠れている存在了解にしたがって行われている。ドレイファスはこのような実践を「背景的实践 (background practice)」と呼んでいる。

ドレイファスがハイデガーに基づいてこのような主張を行うのは、この引用文でも「相互に共有された日常的技能・識別能力・振舞い」という指摘があるように、実践が、明示化された存在了解に基づいているというより、身体に染みついて習慣化された日常的技能による「没入的振舞い」という性格を持っているからである。英語の“coping”が、ここでは世界に内属しているという意味で没入的と訳されていることに注意しておきたい。“cope”, すなわちその状況に的確に対応するという意味を持つ言葉に「没入」という訳語があてられているのは、世界に内属する現存在が、状況に対応する能力を技能として身につけ、身体化されたその能力を意識するしないにかかわらず、世界に向けて発揮するということを実践理論の核心と考えているからである。

ドレイファスの背景的实践概念が重要なのは、前存在論的了解が実践に根拠づけられていることを明らかにしていることにある。実践が前存在論的了解に根拠づけられているのではない。逆である。ドレイファスによれば、了解の前に前存在論的了解があるというハイデガーの基礎的存在論の核心は、実践が先行し、実践によって形成される存在態様をあらかじめ現存在が了解しているという構造をとっていることにある。生活世界の明証性は、意識ではなく、何故実践によって根拠づけられているのかという本質的問いに対して、実践が背景となって前存在論的了解が行われているからだという回答によって保証されている。ここで注意しなければならないのは、ドレイファスのこの主張が、ハイデガーの『存在と時間』を独自に、かつ大胆に読み込んだ結果であることである。『存在と時間』の該当部分（とくに第一篇第5章第31節、32節）を読む限り、「了解はその投企的性格において、われわれが現存在の視となづけるものを実存論的に構成している」と指摘されているだけで、前存在論的了解の背後に実践があるという踏み込んだ指摘をハイデガーが行っていたわけではない。社会的実践理論の中でもドレイファスのこの部分の指摘は、ハイデガー哲学の読み込みの点でかなり先鋭的である。ドレイファスのこの主張を的確にまとめている研究成果にマークオレントの『ハイデガーのプラグマティズム』がある。以下は、その結論部分である (Okrent 1988, p. 130)。

①了解は行為に基礎づけられている。

「あるものがそもそもこういうものであるという了解とか、ある提案が真実であるとかという確信は、様々な行為をどのように行うのか、或いは様々な実体をどのように用いるのかということについての了解がなければ不可能である」。

②了解は目的を持った行為に基礎づけられている。

「何かをどのように行うかを了解するために、了解する人は、ひとつの目的に辿り着く

行動を行うことができなければならない。ひとつの目的に辿り着くよう行為するために、存在は、一定のことがらをどのように行うのかを了解しなければならない」。

③行為は将来の可能性に基礎づけられている。

「ひとつの目的に辿り着くために行為することは、自己の将来の可能性に辿り着くように行為することである。このように行為することは、自己を了解するということを意味している。したがって、自己を了解すること、目的の実現のために目的をもって行動すること、どのように行動するかを了解することは常に、同じ外延的広がりを持っている。それらの全てがなければ、どの存在も、これらのどの決定も持つことができない」。

オクレントによれば、現存在は常にその存在の中で自らを了解している志向的存在、すなわち、自己了解的存在である。了解は、それがなければ志向することができないという意味で、志向性の必要条件である。オクレントはこのことから、「了解が実存の基本的確定要素であるとすれば、それは、現存在の振る舞いの具体的な様態のすべてにとって可能性の条件のようなものである」と述べ、了解が志向性ばかりでなく、振舞い（行為）の条件にもなっていることを指摘している。これらの指摘は、ドレイファスの背景的实践の背景にある、ハイデガーの行為論の核心部分をまとめたものと言うことができる。

しかし、このすぐれたまとめにもかかわらず、オクレントは、『ハイデガーのプラグマティズム』（傍点引用者）という書名に表れているように、ハイデガー哲学をプラグマティズムと安易に結びつける誤りを犯している。19世紀後半に合理主義的、経験主義的哲学に掉さすアメリカの知的伝統として登場したプラグマティズムとデカルトやフッサール現象学を批判することで登場したハイデガー哲学では全くその出自に違いがあるにもかかわらず、「世界が了解可能になる方法や我々が我々の環境と関係する方法は、社会的な場において、時空間の中や目的志向構造の中であらわになる行為を通じてである」(ibid.)という理由から、両者を強引に結びつけようとするオクレントの主張は完全に間違っている。ハイデガーが行為論の主題としたのは、道具的存在と事物的存在の違いから、現存在が環境的世界と関わる存在論的差異にある。この関心を抜きに、『存在と時間』でハイデガーが行為について述べている箇所を都合よく選び出し、それをプラグマティズムと融合せざることは安易すぎると言わざるをえない(ゲルヴェン 2000, 132 頁)。社会的実践理論とプラグマティズムを結びつけようとするオクレントの誤りは、例えば次のような指摘となって現われる。

「『存在と時間』の登場が哲学の専門領域に与えた衝撃的影響は、次の二つのことを考慮に入れた場合にのみ説明できるようになる。その一つは、『存在と時間』の哲学は根本的に新しい発想を持っているということ、そしてもう一つは、20年代の哲学の議論の空気の中ですでに傾向として存していたもの、つまり生活世界のプラグマティズムの立場に立って意識の哲学から離れるという傾向が、この哲学によって完全な形で成し遂げられたにすぎないということである。ここで「プラグマティズム」という言葉によって言われているのは、次の

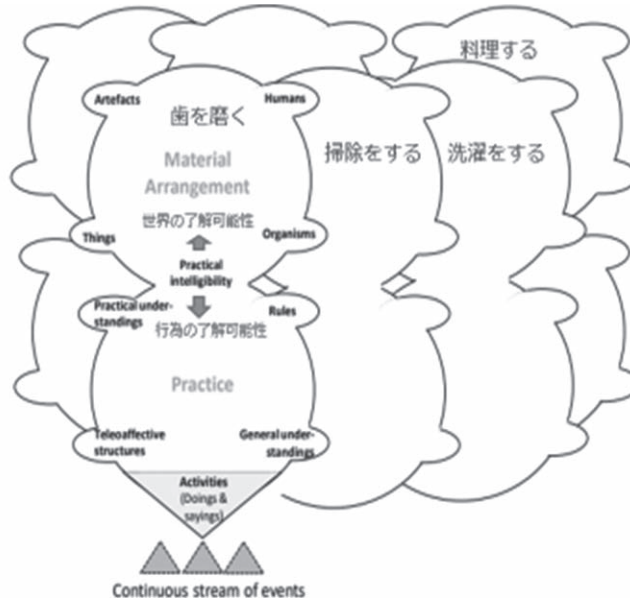
ような哲学的着想である。すなわち行為という領域は、派生的な現象、つまり他の場所で書かれたシナリオを単に上演するというのではなく、むしろ反対に行為という領域こそが他の領域を基礎づける方法論的な基盤を示しているという着想である」(ゲートマン 2001, 170 頁)。

だが、背景的实践は、行為者が適切な日常的技能を身につけているという背景の指摘だけにとどまるものではない。『背景的实践』の編著者 A・ラソルによれば、背景的实践は行為を支える複雑な構造を持ち、それだけ裾野を広げている。その構造は、(a) 身体化された技能性向、(b) 環境世界の道具的文脈、(c) 社会的承認、の三つの構成要素に分解することができる。サッカーを例にとるならば、サッカー選手は、(a) ドリブル、パス、ヘディング、シュートなどなど一連の技術を身体に刻み、その中で状況全体を見渡し、それに対応する能力を獲得している、(b) サッカーピッチ、ユニフォーム、シューズ、ボール、ホイッスル、フラッグ、ゴールポストなどの具体的な道具的文脈に組み込まれ、(c) ストライカー、ミッドフィールダー、マネージャー、レフェリー、ラインズマンなど、社会的に共有された語彙を用い、社会的に構築された役割を担っている。裾野の広がりとは、ある実践が行われるときの背景がそれだけ社会の隅々に広がり、共有されることで、一般化されているということである (Dreyfus 2017)。

### (3) 社会的秩序と社会的実践概念図

第1図は、以上のことを描いた概念図である。狭義の生活世界とは、この図の上部に描かれている社会的秩序にあたる。社会的秩序は、意識でも、言説でもなく、社会的実践によって支えられる関係にあること、更に、その実践は、すること、述べることという行為によって支えられ、組織化されている。組織化された実践が生活世界という世界を組織化している関係にある。生活世界とは実践が束ねられることで形成される生活空間という本稿の立場からすれば、歯を磨く、掃除をする、洗濯をする、料理する……など、無数に広がる実践を束ねることで、その全体がその人の生きる世界を作っていることになる。例えば、洗濯をするという実践を媒介に形成されるひとつの世界(図では物的編制と説明されている)は、洗濯をするという主体としての人間(Humans)と、洗濯機、洗剤などの人工物(Artifacts)、洗濯水など人間を除く他の生命体を意味する有機体(Living Organisms)、そして清潔感など人間が行う行為の直接的結果ではない、感情を含む非生命実在を意味する事象(Things)を構成要素として、それらの結びつきによって形成されている。束ねられるということの意味は、ひとつひとつの社会的秩序がたんに重なり合って生活世界を形成しているという意味ではない。実際の生活世界では、ある要素が複数の秩序にまたがって用いられている場合が通常である。例えば清潔感は洗濯という秩序の他に、掃除を行うという場合の要素でもあるし、歯ブラシは歯を磨くことの他に、隙間掃除をする時に使用されたりもする。そもそも、

第 1 図 社会的秩序と社会的実践概念図



(出所) Geog Loscher et. al. (ed.), *Management, Organizations and Contemporary Social Theory*, Routledge, 2019, p. 26 を一部加筆修正。

生活世界はさしあたり当該個人にとっての個別世界であり、人間は彼・彼女が関わる全ての秩序に関わっている。そうでなければ、その人にとっての目的に合わせた生活世界は形成されない。それぞれの秩序がどのように有機的につながっているかは偶有的である。

ここで重要なことは、社会的秩序の構成要素のひとつである人間の位置と人間が果たす行為主体性の役割である。人間は、社会的秩序の構成要素であると同時に、社会的秩序を支える実践の主体でもあるというように、両義性を持っている。レクヴィッツは、この役割について、「各個人は実践の「担い手 (carrier)」として行為する」と述べている (Reckwitz 2002a)。「担い手」という言葉には、他の要素をまとめる編成主体という意味が込められている。第 2 図は、レクヴィッツの指摘を受けて、実践主体の意味と位置を明確にするために作図された概念図である。ハイデガーが、事物的存在者とともに、何よりも現存在の存在論的分析の意義を強調するのも、現存在が環境世界の中で道具を使いこなす主体として特別の役割を持っていることを重要と考えているからである。第 2 図は、この点を説明するために、実践主体を要素 A~C が交差する真中の場所に位置づけている。

行為主体性を人間ばかりでなくそれ以外にも認めようとする、通常 ANT と呼ばれているアクター・ネットワークセオリー (Actor Network Theory) は、物質的編制と実践との関係の核心に触れているという意味で、実践主体を理解する上で非常に重要な問題を提起している。どの社会的実践理論家も、モノにも行為主体性があるという点で意見が一致している。

実践主体としての人間の役割と同時に、人間以外にも行為主体性を認める点で社会的実践理論は、「人間主義」(humanism)であると同時に、「ポスト人間主義」(post-humanism)でもある。しかし、その共通点にもかかわらず、ANTが提起するそれ以外の個別論点を見ると、社会的実践理論家の間で意見が対立している場合が多い。そのひとつに、物的編制を誰が行うのか、すなわち、行為主体性はどこにおいて発揮されるのかという問題がある。シャツキと、消費社会研究者として著名なエリザベス・ショブは、どちらも社会的実践理論に立脚しながら、この点で鋭く意見が対立している。それぞれの主張を見てみよう。

「私は、非人間的エイジェンシーの存在を否定するつもりもない。しかし、その棲家は社会的秩序にあるのであって、私が想定している社会的実践ではない。実践とは、社会的秩序の構成要素のひとつが行う束となった活動である」(Schatzki 2002, p. 71)。

モノ、テクノロジーなど非人間物質性にもエイジェンシーがあることを認めた上で、その存在場所は社会的秩序であって、実践にはないことが率直に述べられている。社会的秩序を(狭義の)生活世界に置き換えている本稿の立場からすれば、シャツキのこの指摘に従うかぎり、行為主体性は社会的秩序、したがって生活世界の編制に関わることであり、社会的実践の場の要素ではないことになる。第1図で言えば、行為主体性は図の上部に限定されることになる。他方、ショブは、行為主体性を社会的秩序に限定しようとはしていない。

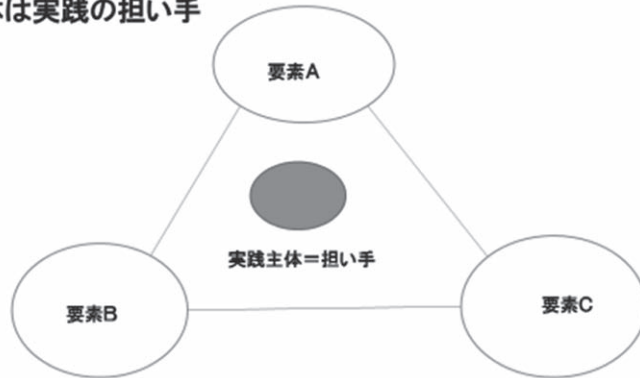
「シャツキのスキームでは、人工物、モノ、テクノロジーは事実上、実践の一部ではなく、実践とともに生産を行いつつ、しかし明確な特徴を持つ「編制」を形成する一部と位置づけられている。このことは、アクターネットワーク理論がこの等式の「編制」上の側面に留意しているとしても、そのことで「(秩序の)編制と結びついた実践が社会現象の構成に役立っている」と認識することはできないという議論へシャツキを導いてしまうことになる。こうした議論は、実践、モノ、行為者がどのように概念化されるのか、それらの関係においてこのことは何を意味するのかという点の違いを表している」(Shove et. al. 2012)。

ショブの主張の核心は、行為主体性を非人間以外にも拡張する意義をシャツキとともに確認した上で、それを秩序領域にではなく、実践の編制にあてはめようとしていることにある。ショブの場合、編制は実践概念であって、シャツキのような秩序概念ではない。このことからすると、両者の対立は、社会生活を広義に理解しようとしているショブと、狭義に理解しようとしているシャツキの違いに由来しているかのように見える。しかし、注意しなければならないのは、シャツキの場合も、社会生活を実践空間として理解する広義の道は開かれており、ここに両者が対立する基本的理由があるわけではないことである。むしろこの対立には、生活世界の形成に果たす社会的実践の役割、すなわち、社会的実践の可能性という、社会的実践理論の本質にかかわる理解の違いが背景にある。シャツキが、「私が考える編成とはラッセルやカロンがネットワークと呼ぶものと近い」というように(Schatzki 2019, p. 36)、ANT研究者の問題提起に共感する一方、誰がネットワークを形成するのかという



第 2 図 実践主体の位置

**実践主体は実践の担い手  
である**



(出所) Laura Piscicelli et. al., The Individual-Practice Framework as a design tool to understand consumer behavior, A Genusced., *Sustainable Consumption*, 2016, p. 5.

問題にきちんとした説明を行うことができない点で ANT を厳しく批判するのは、社会生活を構成する要素のひとつである人間（実践主体）の他の構成要素とのつながりだけを強調するだけでは社会的実践の役割がまったく評価されず、その意義も明らかにならないからである。シャツキは、「ANT では、人間の社会生活の中心の特徴、すなわち編成とつながり、社会現象の構築に役立つ実践をつかまえることができない。ANT はまた、その結果、実践と物質的編成の関係を研究することができない。要するに、人間活動や社会生活に対する物質性の意義は個人アクターと具体的対象物との間の構築的、因果的な関係ばかりでなく、どのように物質的実体が時空間的に広がりを持つ多様な組織化された人間行為とつながっているかということにある」と述べている (Schatzki 2002, p.)。実践主体は社会生活を編制する役割と同時に、実践の構成要素を組織化するという二重の評価を必要とする。シャツキの主張にしたがって作図された第 1 図が、物的編制と実践をつなぐ結節点に実践的理解を位置づけ、実践主体の役割を明らかにしようとしているのはそのためである。

シャツキとショブのこのような違いは、両者の実践を構成する要素の違いに反映している。第 1 表に示されているように、ショブは、実践を構成する要素の中に物質を入れることで、実践領域の中で行為主体性を物質にも認めている。第 1 図に示されているように、シャツキが物的編制を社会的秩序領域の中で行い、人工物をその構成要素としていることと比較すると、ショブの実践構成要素は対照的である。ショブの理解を第 1 図にあてはめるならば、行為主体性は図の全体にあたることになるが、その重心は下部に置かれていることになる。社会的実践理論を通じて生活世界を再構成することを目的とする本稿の関心からすれば、生活世界の形成の場と形成契機を実践に求めるシャツキの議論の方に説得力がある。その根拠は、実践的理解可能性を、世界に向けた開示と自己の開示の二つの方向性を明確にしたハイデガ

第1表 シャツキとシヨブの実践構成要素の違い

	実践構成要素
シャツキ	① 実践的理解 ② 規則 ③ 目的志向構造 ④ 一般的理解
シヨブ	① 物質 ② 有能性 ③ 意味

(出所) Schatzki (1996, 2002), Shove (2003, 2012)

一哲学に沿っていることにある。生活世界は、実践が束ねられることによって開示された世界である。歯を磨く、掃除をする……などの具体的な行為をたんに束ねただけでは、現象学としての生活世界が浮き出してくることはない。実践論的解釈の可能性を経て世界に開示されることで、生活世界は現実的な意味を持つことになる。

第1図の下部に描かれている実践は、活動（すること、述べること）と、「実践的理解 (Practical Understandings), 規則 (Rules), 目的志向構造 (Teleoaffective Structures), 一般的理解 (General Understandings) といった構成要素を編成する実践に分かれている。シャツキは、「実践とは活動の束、すなわち行為の組織化されたつながりである。その結果、どの実践にも、活動と組織化という、二つの領域が含まれている」と述べている (Schatzki 2002, p. 71)。実践の組織化とは、後者の実践を指し、これらの構成要素の結びつきによって実践が行われているということの意味している。シャツキが言う組織化を、レクヴィッツは「ブロック化」と表現している (Reckwitz 2002a)。シャツキは、前者を「パフォーマンスとしての実践」(practice as performance), 後者を「実体としての実践」(practice as entity) と呼んでいる。「パフォーマンスとしての実践」が可視化しやすい性格を持っているために、実践を行為や行動と同等視されてしまいがちなのは、その陰に実践の組織化という契機のあることが十分に認識されていないからである。実践をパフォーマンスに限定してしまうと、実践の中身も、社会的秩序との関係も明らかにならなくなってしまふ。

実践的理解とは、どのように当該行為を行うのかを知ること、具体的には、X という行為をどのように行うかを知ること、X を行うことにどのような意味があるのかを知ること、X への対応と同時にそれをどのように引き起こすのかを知ること、という三つの能力を実践主体が備えていることである。ブルデューのハビトゥスや実践感覚、ギデンズの実践知識に近い。「近い」ということの意味は、実践的理解によってその行為を行うことの意味を確定したり、その行為を行うことが統率されているのではないという点で、彼らと異なる部分があるということである。実践的理解は、実践的了解可能性という行為の了解可能性によっ

て選り出された行為を行う能力を指している。

規則とは、当該行為を行う際の明示的やり方や原理、指針、指示である。

目的志向構造とは、一定範囲の規範化された、階層的に秩序化された目的、プロジェクト、タスクである。実践には、何のために行うのかという実践主体の目的がある。例えば、企業実践ならば、利潤形成、利潤の極大化、需要充足、機械の維持、十分な原材料の確保などがその目的となる。この目的を達成するために、どのような企業活動を具体的にやるべきかというプロジェクト、そしてこのプロジェクトがスムーズに行えるよう具体的な仕事（タスク）の中身が決められていく。三つの連関は、目的-プロジェクト-タスクの順で階層化された編成形態をとっている。この連関を支えているのが規範性である。ここで言う規範性とは、実践が行為の了解可能性によって規定されていることから、「何のために」という直接的目的の先にある、社会で受け入れられるか否かの判断を含めた、「すべきことがら」を規定しているものである。規範と目的-プロジェクト-タスクの関係はしばしば対立し、規範論争にまで発展する可能性がある。規範が「すべきことがら」を規定している以上、需要可能性も含め、何をすべきかについて共有できず、それが目的やプロジェクトに反映し、実践全体の揺らぎとなって現われる可能性があるからである。目的志向構造を規定している実践的了解可能性は了解の可能性であって、そこには揺らぎの構造が伏在していることも見ておかなければならない。

一般的理解とは、実践主体が、実践的理解、規則、目的志向構造を十分に理解した上で、当該実践を行うことの意義をつかみ取ることである。それは、宗教心であったり、地域への貢献、企業組織への帰属意識、家族を養うことへの責任感であるかもしれない。明示的にせよ、非明示的にせよ、当該実践を継続的にやる実践主体の内的心性というべきものが一般的理解の形で現れる。

#### (4) 小括

社会的実践理論の視座から生活世界論を再構成することを目的に、社会的実践理論家シャツキを中心に、フッサール現象学の生活世界論の問題点を指摘しつつ、それに代わる代替像をこれまで説明してきた。新しい像を探究する中で明らかになったのは、フッサールに対する批判の基礎に、前期ハイデガーの存在論的実存哲学があることである。ハイデガーの名著『存在と時間』を読むかぎり、生活世界やその世界の形成に果たす実践（行為）の役割がそれ自体として主題化されているわけではない。しかし、それにもかかわらず、前期ハイデガーには、世界=内=存在、被投や企投、了解や解釈、平均的日常性、存在論的差異、共現存在など、社会的実践理論から生活世界を再構成しようとする際に必要となる基礎的概念が散りばめられている。シャツキなど社会的実践理論家の生活世界論は、後期ウイトゲンシュタインの家族的類似性、生活形式、私的言語などとともに、前期ハイデガー哲学の基礎的概念

を社会的実践の視角から読み込み、独自に再構成したものである。「生活世界と実践論的転回—ハイデガーと社会的実践理論」という本稿のタイトルは、このことを意識し、社会的実践理論がハイデガーから学ぼうとしていることがらの意義を追究するねらいからつけられている。

社会的実践理論の視座から生活世界を再構成しようとする場合、「何故実践なのか」というそもそもの問いに答えることが最も重要となる。「何故意識ではないのか」、「実践が意識に代わるものとして、生活世界の基軸的位置にいないなら何理由は何か」という問いに答えること、その際、ハイデガー哲学がどのようなヒントを与えてくれているのか、少なくともこの問いに答えるために必要な基礎的概念をどのように提供してくれているのか、ということが重要となる。

これらの問いに答える上で最も重要になるのが実践的了解可能性である。シャツキは、この概念を、ハイデガーの了解と解釈概念から学んでいる。別稿で明らかにするように、被投→企投→了解→解釈→意味と言明という過程をたどるハイデガーの基礎的存在論の中からシャツキが学んだのは、了解を解釈し直すこと、そしてそれを根拠づけている実践の位置であった。これまで説明してきたように、実践がこの過程で登場するのは、了解が行われる前、すなわち被投から企投に移る段階においてである。したがって、了解が行われるのはそれ以前、すなわち前存在論的了解ということになる。ハイデガーは、環境世界のあり方をつかまえる上で配視の重要性を指摘していた。それにもかかわらず、ハイデガーはそれが何に根拠づけられているかを明らかにすることができなかった。了解の前に起きていることがらについて、ハイデガーは、企投段階での本来性と非本来性の違いを指摘しているだけで、それらを横断する根拠について指摘することはできなかった。行為には固有の「視」があると指摘していたハイデガーも、その意味を掘り下げることができず、実在という現存在の存在様態の指摘にとどまってしまう。シャツキの社会的実践理論はハイデガーのこの部分を鋭く衝いている。シャツキの分析が誰よりも優れているのは、この段階の了解を認識論として、すなわちフッサールのように意識を媒介に構成するのではなく、実践論としてつかまえることの重要性を指摘したこと、すなわち、ハイデガーが存在論として構成しようとしていた了解の場所に実践論を組み入れ、実践論的了解概念として再構成したことにある。シャツキの生活世界論は、実践論的了解の理解を進めることで、そのあり様を具体的に追究しようとしている。

実践論的了解は、狭義の生活世界を意味する社会的秩序（物的編制）の有意義性を開示する方向と、実践を行う主体の役割を開示する方向の二つに分かれて展開されている。二つの方向に分かれるのは、実践的了解可能性が両者の結節点に位置し、それぞれを開示する役割を担っているからである。シャツキは二つの方向を追究することで明らかになった全体像を実践空間と名づけている。生活世界とは、物的編制とそれを支える実践を併せた実践空間を

指している。物的編制を生活世界と呼ぶこともあるが、生活世界の全体を展望するという意味で、実践空間の方が生活世界と呼ぶに相応しい。生活世界とはこのように、共現存在である人々がともに生きている場、すなわち生きた空間のことである。

この空間の本質は、起床する、歯を磨く、掃除をするなど、実際に行われている行為の陰に隠れ、表面に出てくることは必ずしもない。根源性の明証領域としての生活世界は、しばしばこれらの行為と同等視されてしまっている。生活世界論に課せられた課題は、これらの行為の意味をあらわにすること、すなわち生活世界を現象学的に開示することである。これらの行為の集積によって生活が形成されているというだけでは、全ての社会現象の背景に人々の生きた生活があるということを指摘しただけにとどまり、生活世界が明証性の領域であることの意味も明らかにならなくなってしまう。社会的実践理論の生活世界論に課せられているのは、この課題を実践論として再構成することにある。フッサールが現象学的還元の手法を使って生活世界の本質に迫ろうとしたように、社会的実践理論もまたハイデガーに学びながら、現象学の課題として生活世界に迫ろうとしている。

附記 本稿は東京経済大学 2019 年度国内研究費による研究成果の一部である。

#### 欧文参考文献

- Anscombe, G.E.M (1957), *Intention*, Harvard University Press.
- Bernstein (1971), Richard, *Praxis and Action*, Penn Press.
- Bonnell, V. E. and Hunt, Lynn (ed.) (1999), *Beyond the Cultural Turn*, University of California Press.
- Buch, Anders and Elkjear Bente (2015), *Pragmatism and Practice Theory: Convergence or Collisions*, paper presented at OLKC.
- Buch, Anders and Schatzki, T.R. (2019), Introduction: Question of Practice: Related Perspectives From Pragmatism and Practice Theory, Buch, Anders and Schatzki, T. R. (ed.), *Questions of Practice in Philosophy and Social Policy*, Routledge.
- Dewey, John (1980), The Need for a Recovery of Philosophy, Boydston, Ann (ed.), *The Middle Works, 1899-1924*, Southern Illinois University Press.
- Dreyfus, Hubert (1991), *Being-in-the-World*, The MIT Press.
- Do (2017), Background Practice, Wrathall, M. A. (ed.) Oxford UP.
- Doris Bachmann-Medick (2016), *Cultural Turn*, De Gruyter.
- Heidegger, Martin (1975), *The Basic Problems of Phenomenology*, translated by Albert Ofstadter, Indiana UP.
- Do. (2010), *Being and Time*, translated by Joan Stambaugh, State University of New York Press.
- Jonas, M., Littig, Beate and Wroblewski (ed.) (2017), *Methodological Reflections on Practice Oriented Theories*, Springer.
- Miettinen, Reijo (2010), *Re-Turn to Practice: An Introductory Essay*.

- Okrent, Mark (1988), *Heidegger's Pragmatism*, Cornell UP.
- Reckwitz, Andreas (2002a), Toward a Theory of Social Practices A Development in Culturalist Theorizing, *European Journal of Social Theory*, 5 (2).
- Do (2002b), The Status of the "Material" in Theories of Culture: From "Social Structure" to "Artefacts", *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 32-2.
- Rorty, Richard (ed.) (1992), *The Linguistic Turn*, The University of Chicago Press.
- Sandberg and DallAlba (2009), Returning to Practice Anew: A Life-World Perspective, *Organization Studies*, 30-12.
- Schatzki, Theodore R. (1993), Wittgenstein + Heidegger on the Stream of Life, *Inquiry: An Interdisciplinary Journal of Philosophy*, 36-3.
- Do. (1996) *Social Practices A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, Cambridge UP.
- Do. (1997), Practices and Actions A Wittgensteinian Critique of Bourdieu and Giddens, *Philosophy of the Social Sciences*, 27-3.
- Do. (2000), A New Societst Ontlogy, *Philosophy of the Social Science*, vol. 33
- Do. (2002), *The Site of the Social*, Pennsylvania State University Press.
- Do (2007), Early Heidegger on Sociality, H. L. Dreyfus and M. A. Wrathall (ed.), *A Companion to Heidegger*, Blackwell.
- Do (2010), *The Timespace of Human Activity*, Lexington Books.
- Do (1987), Overdue Analysis of Bourdieu's Theory of Practice, *Inquiry*, 30-1,2.
- Do (2010), Materiality and Social Life, *Nature and Culture*, 5 (2).
- Do (2017), *Martin Heidegger: Theorist of Space*, Franz Steiner Verlag.
- Do., (2019), *Social Change in A Material World*, Routledge.
- Schatzki, T. et. al. (ed.) (2001), *The Practice Turn in Contemporary Theory*, Routledge.
- Shove, Elizabeth (2003), *Comfort, Cleanliness + Convenience*, BERG.
- Shove Elizabeth and Walker Gordon (2010), Governing transitions in the sustainability of everyday life, *Research Policy*, no. 39.
- Shove, Elizabeth, Mika, Pantzar and Watson, Mtto (2012), Elizabeth & Watson, *The Dynamics of Social Practice*, Sage.
- Wrathall, M.A., Heidegger on Human Understanding, Wrathall, M.A. (ed.) (2013), *Heidegger's Being and Time*, Cambridge UP..

#### 邦語参考文献

- 池田喬 (2011) 『ハイデガー 存在と行為』, 創文社
- 同 (2015) 「生活世界の発見—初期ハイデガーと現象学」 細川亮一・斎藤元紀・池田喬編著『始まりのハイデガー』所収, 晃洋書房
- 江原由美子 (1985) 『生活世界の社会学』 勁草書房
- 門脇俊介 (2000) 「生活世界, 志向性, 人間科学」 新田義弘編『フッサールを学ぶ人のために』所収, 世界思想社

- 同 (2002) 『理由の空間の現象学 表象的志向性批判』 創文社
- 同 (2007) 『現代哲学の戦略』 岩波書店
- 同 (2008) 『『存在と時間』の哲学』 産業図書
- 同 (2010) 『破壊と構築 [ハイデガー哲学の二つの位相]』 東京大学出版会
- 門脇俊介・信原幸弘編 (2002) 『ハイデガーと認知科学』 産業図書
- グレーシュ, ジャン (2007) 『『存在と時間』講義』 (杉村靖彦訳), 法政大学出版会
- クワント, レミ・C (昭和 51) 『メルロ＝ポンティの現象学的哲学』 (滝浦静雄他訳), 国文社
- ゲートマン, カール, フリードリッヒ 「『存在と時間』におけるハイデガーの行為概念」 『ハイデガーと実践哲学』 所収, 法政大学出版会
- ゲルヴェン, マイケル (2000) 『『存在と時間』註解』 (長谷川西涯訳), ちくま学芸文庫
- シュッツ, A (2006) 『社会的世界の意味構成』 (佐藤嘉一訳), 木鐸社
- 同 (2015) 『生活世界の構造』 (那須壽訳), ちくま学芸文庫
- ドレイファス, ヒューバート・L (2000) 『世界内存在 『存在と時間』における日常性の解釈学』 (門脇俊介監訳), 産業図書
- 西研 (2005) 『哲学的思考』 ちくま学芸文庫
- ハイデッガー, マルティン (1994) 『存在と時間 上・下』 (細川貞雄訳), ちくま学芸文庫
- 福士正博 (2020a) 『持続可能な消費と社会的実践理論』 柊風舎
- 同 (2020b) 「生活世界と実践論的転回—ハイデガーと社会的実践理論 (1)」 『東京経学会誌 (経済学)』 307 号
- 同 (2020b) 「生活世界と実践論的転回—ハイデガーと社会的実践理論 (2)」 『東京経学会誌 (経済学)』 309 号
- フッサール, エドモント (1979a) 『イデー I, II』 (渡邊二郎訳), みすず書房
- (1979b) 『イデー II』 (渡邊二郎訳), みすず書房
- (昭和 49) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 (細谷恒夫・木田元訳), 中央公論社
- (1999) 『経験と判断』 (長谷川宏訳), 河出書房新社
- (2004) 『ブリタニカ草稿 現象学の核心』 (谷徹訳), ちくま学芸文庫
- ボルノー, O. F (1986) 『デイルタイとフッサール 21 世紀哲学の源流』 (高橋義人訳・解説), 岩波書店
- 藤本隆 (1998) 『ウイトゲンシュタイン』 講談社学術文庫